HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道豪雪過疎地域における広域的除排雪ボランティアシステム構築に関する実践的研究(2) : ボランティア活動におけるエンパワーメント・援助出費・継続意図
Author(s)	小西, 信義; 中前, 千佳; 原, 文宏 他
Citation	北海道の雪氷, 32, 46-49
Issue Date	2014-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56281
Type	journal article
File Information	2013_snowhokkaido32_11_Konishi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道豪雪過疎地域における
広域的除排雪ボランティアシステム構築に関する実践的研究(2)
－ボランティア活動におけるエンパワーメント・援助出費・継続意図－
Practical Study on the Volunteer for Snow removal

小西信義（北海道大学大学院文学研究科），中前千佳，原文宏（一般社団法人北海道開発技術センター），堀翔太郎（北海道大学文学部），佐藤浩輔，大沼進（北海道大学大学院文学研究科）
Nobuyoshi Konishi, Chika Nakamae, Humihiro Hara, Shoutarou Hori, Kosuke Sato, Susumu Ohnuma

１．はじめに

除排雪の担い手の減少と高齢化は，寒冷過疎地域では切実な問題である．この問題に対し，例えば，新潟県の「越後雪かき道場」や山形県の「やまがた除雪志隊」，北海道上富良野町の「雪はね隊」などの実施例のように，住民による自助機能が低下した地域に，雪処理の担い手を地域外から調達する広域的除排雪ボランティアの取組が各地で展開されている．このような取組は，眼前の積雪を除去し，高齢者などの生活環境を改善するという点で一定の効果を果たしている．しかし，取組の持続可能性を問われれば，運営資金やボランティアの確保などさまざまな課題が山積している．

本研究では，持続可能な広域的除排雪ボランティアの構築に資するべく，ボランティアの人的確保の側面に焦点を当てる．安定的なボランティアの人的確保のためには，参加者の拡大だけではなく，継続的な参加も必要不可欠な要素である．これまでの援助行動研究では，ボランティア活動を通したエンパワーメント[1)]や援助成果[2)]の獲得が，ボランティア活動の継続性を高めると言われてきた．一方，援助に要する援助者の出費（金銭に限らない）は，活動の継続性を阻害する要因であると言われてきた．

エンパワーメントとは，活動に関与することで獲得される個人のコントロール感，あるいは影響感，自身の生活に対する決断力のことである．スキルや自信を得たり（有能感），コミュニティなどに影響を及ぼしたり（有効感），スキル獲得や周囲への影響を及ぼしたりする上で大きな援助となる人間関係のネットワーク（連帯感）の獲得で構成される．また，援助出費[3)]とは，援助するにあたっての種々の自己犠牲と言われており，具体的には「努力」「金銭」「危険」「時間」で構成される．

そこで，本報告では，上記の視点から，実際に広域的除排雪ボランティアに参加した人びとに対し質問紙調査を行い，ボランティア活動前後のエンパワーメントや援助成果，援助出費の変化を観察するとともに，「次も参加したい」と思う継続意図がどのような要因から影響を受けているのかを分析した途中経過を報告する．

２．研究方法・手続き

調査は，2013 年 2 月～3 月における「雪はねボランティアツアー」内で行われた．このツアーは，岩見沢市美流渡地区（2 月 3，16，23 日），上富良野町泉地区（2 月 9

Copyright © 2013　公益社団法人日本雪氷学会北海道支部

日），三笠市弥生・幾春別地区（2 月 10 日），倶知安町琴和地区（3 月 10 日）における除排雪が困難な世帯（独居高齢者世帯など）の雪処理を公募ボランティアによって支援する，札幌発着型の日帰りボランティアツアーのことである．本研究における調査対象者は，ツアー参加者（177 名）のうち現地集合を除いた札幌市発着のバス利用者 141 名だった．対象地域間の往路・復路のバス移動中に，事前・事後の質問紙を配布・回収した．回答率は，事前で 91.7%，事後で 91.5%であった．

本報告では，複数回参加したことの効果を除くため，初回参加のみの回答（100 名）を分析に用いた．

３．質問紙の構成

事前・事後の質問紙では，エンパワーメントや援助成果，援助出費などの除雪ボランティア活動への印象，除雪ボランティア活動に関わる人への印象，対象地域への印象について回答を求めた．事前では除排雪の経験，ボランティア活動の経験，性別・年齢などの回答者の基本属性を尋ねた．事後の質問紙では，今後のボランティア活動への継続意図，ボランティアツアー運営面への印象について回答を求めた．

除雪ボランティア活動への印象，除雪ボランティア活動に関わる人への印象，対象地域への印象は事前で「～だろう」，事後で「～だった」というように，活動を挟んで対の質問項目となっている．上記の「印象」を尋ねる項目は，“そう思わない”～“そう思う”の 5 件法で回答させた．

特に，本報告では事前および事後の除雪ボランティア活動への印象と事後の今後のボランティア活動への継続意図を中心に報告する．

４．調査結果

（１）回答者の基本属性

回答者の性別は男性が 7 割強で，年代は 20 代から 60 代の世代が各々2 割ほどであった（図 1，2）．

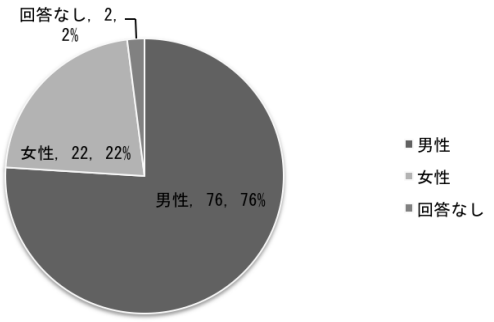

図 1. 性別

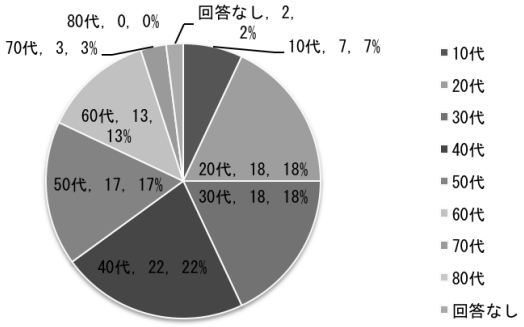

図 2. 年齢

（２）エンパワーメントおよび援助成果

エンパワーメントおよび援助成果に関する分析は,以下の変数を用いた（表1）：「成長感」（除雪ボランティア活動を通じて自分自身が成長できた，などの4項目；事前 α=.83, 事後α=.79），「サポートネットワークの拡張」（困ったことがあれば，サポートや助力を求められるつながりができた，などの3項目；事前 α=.82, 事後α=.79），「人

Copyright © 2013　公益社団法人日本雪氷学会北海道支部

間関係の拡張」（新しい出会いがあり，他のボランティアの人たちとの人間関係の輪が広がった，などの3項目；事前α=.88, 事後α=.90），「貢献感」（人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた，などの2項目；事前α=.75, 事後α=.83），「充足感」（除雪ボランティア活動を通じて気持ちの充足感を得ることができた，などの5項目；事前α=.84, 事後α=.87），「有能感」（自分にできることで，困っている人の役に立つことができた，などの5項目；事前α=.88, 事後α=.87）．

次に，各変数における事前と事後の変化についてt検定（有意水準5%）を行ったところ，充足感のみが有意に上昇し，サポートネットワークの拡張・貢献感は下降した．成長感・有能感・人間関係の拡張については有意な変化は見られなかった．

表1. 事前・事後におけるエンパワーメントおよび援助成果の変化

変数	平均値（標準偏差）		t 値
	事前	事後	
成長感	3.88(0.79)	3.90(0.73)	0.38
サポートネットワークの拡張	3.33(0.82)	3.00(0.82)	3.49***
人間関係の拡張	3.80(0.81)	3.65(0.90)	1.78
有能感	3.96(0.74)	4.01(0.70)	0.77
貢献感	3.84(0.75)	3.64(0.84)	2.58**
充足感	3.88(0.70)	4.19(0.64)	6.76***

*** p<.001, ** p<.01

（３）援助出費

援助出費に関する 8 項目については，見ず知らずの他者と共同作業をすることで気疲れするだろう,などの3項目のみを「共同作業による徒労感」(事前 α=.73, 事後 α=.73)の変数とし，それ以外の 5 項目は単独項目で変数として扱った（表 2）．

次に，各変数における事前と事後の変化について t 検定（有意水準 5%）を行ったところ,「時間」(他にやるべきことがあっても，除雪ボランティア活動に費やす時間を優先したほうがよかった）が有意に上昇し,「危険」(落雪や滑って転ぶなどの危険が自身に及ぶかもしれないと思った）,「努力」(除雪の技術を体得したりするのに努力した）,「金銭」(参加費が高かった）,「共同作業による徒労感」は有意に下降した．「身体的疲労感」(除雪作業により肉体的に疲れた）に有意差は見られなかった．

表 2. 事前・事後における援助出費の変化

変数	平均値（標準偏差）		t 値
	事前	事後	
身体的疲労感	3.93(1.27)	3.71(1.25)	1.58
危険	3.29(1.11)	2.76(1.43)	3.61***
努力	3.48(1.11)	2.93(1.32)	3.64***
時間	2.47(0.91)	3.15(0.98)	5.85***
金銭	1.76(0.85)	1.55(0.88)	2.10*
共同作業による徒労感	2.55(0.96)	2.03(0.90)	5.41***

*** p<.001, * p<.05

（４）ボランティア継続意図

今後のボランティア継続意図に関しても，次回もこの地域で，除雪ボランティア活動に参加したい，などの 4 項目を「継続意図」の変数とした（α=.89）．

Copyright © 2013 公益社団法人日本雪氷学会北海道支部

「継続意図」の平均値は 4.01 で，標準偏差は 0.74 だった．

（５）継続意図の規定因

継続意図を従属変数とし，事後のエンパワーメントおよび援助成果，援助出費を独立変数とした重回帰分析を行った（図 3）．その際，事前の影響を統制し，ステップワイズ法による変数選択を行った．

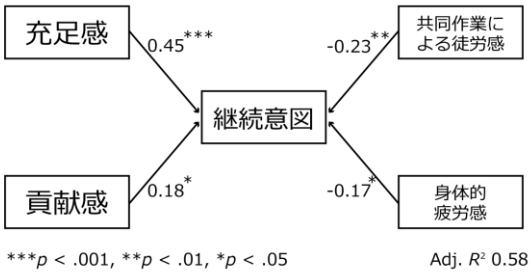

図 3. 継続意図の規定因

変数選択の結果，「充足感」「貢献感」「共同作業による徒労感」「身体的疲労感」が「継続意図」に影響を与えていた．「充足感」および「貢献感」は有意に正の影響を与えているが，「共同作業による徒労感」「身体的疲労感」は負の影響を与えた．つまり，活動そのものを楽しめたり，人や地域に貢献できたと思えば，継続意図を高めるが，共同作業による徒労感や身体的疲労感を感じれば継続意図を低下させた．

５．結論と考察

本報告では，今後のボランティアの人的な持続可能性を検討するにあたり，ボランティアの継続性に影響を与えると言われているエンパワーメントおよび援助成果，援助出費の事前・事後の変化を観察し，継続意図の規定因を分析した．

エンパワーメントおよび援助成果について，充足感が上昇したのは，雪かきという適度な運動と共同作業を一種のアクティビティとして純粋に楽しめたことからであろう．一方，下降したサポートネットワークの拡張・貢献感については，今後助力を与え合う関係性や人や地域に貢献しようという気持ちの高揚が，わずか一日の除排雪共同作業では獲得しにくいことを示唆している．また，有意な変化が見られなかった成長感・有能感については，事前でも高い値を示し，回答者にとって「期待通り」のエンパワーメントおよび援助成果を獲得できたと言えるのかもしれない．しかし，人間関係の拡張については，下降傾向が見られる．

援助出費については，大半の項目において援助に費やすコスト感は下降したため，回答者が活動前に想定していたコスト感より，実際のコスト感は低かったと言える．

最後に，継続意図の規定因の分析から，取組の持続可能性における今後の課題を提示する．1)充足感や貢献感を向上させるプログラム作りが有効だと考えられる．一方，2)共同作業の気疲れや身体的疲労は，逆に次回の継続意図を阻害する規定因として考えられ，共同作業を安全かつ円滑に行えるかの事前講習や現場の諸問題を即座に解決できる「雪かきリーダー」の養成など，が今後の課題として挙げられるだろう．

参考文献

1)　前田洋枝ら，2004：環境ボランティアによる資源リサイクル活動とエンパワーメント―参加者の有能感・連帯感・有効感の獲得と今後の活動意図―，*廃棄物学会論文誌*，**15**，5，398-407.

2)　妹尾香織ら，2003：援助行動経験が援助者自身に与える効果－地域で活動するボランティアに見られる援助効果－，*社会心理学研究*，**18**，2，106-118.

3)　高木修，1996：人を助ける心，東京，サイエンス社.

Copyright © 2013　公益社団法人日本雪氷学会北海道支部